

アキール文庫 サイイド・アフマド・ハーンとアリーガル運動関連文献*

ムハンマド・アースィフ**

山根 聡*** (日本語訳・補)

Annotation of Books on Saiyid Aḥmad Khān and the Aligarh Movement in the Aqeel Collection

Muhammad ASIF

YAMANE So (Japanese Translation, Supplement)

Sir Syed Ahmad Khan (Sar Saiyid Aḥmad Khān, 1817-98) is known as the leader of the social and political reform movement called the “Aligarh Movement”, a modernization drive by Muslims in India, as well as the founder of the modernized educational institution, namely, Aligarh University. For the modernization of Indian Muslims, Ahmad Khan wrote many articles and essays in his own magazines, and the followers of Ahmad Khan also wrote many books and articles for the same purpose. The Aqeel Collection of Kyoto University has more than 200 books and magazines about Ahmad Khan and the Aligarh Movement.

Among these books, there are some rare books and magazines that were published in the late nineteenth century and the beginning of the twentieth century, that is to say, in the contemporary period of Ahmad Khan himself.

Although the founder of the Aqeel Collection, Dr. Moinuddin Aqeel (Mu‘īn al-Dīn ‘Aqīl), migrated to Pakistan during his childhood and grew up in the city of Karachi, the Aqeel Collection has quite a number of books and magazines that were published in India, especially in Aligarh, the center of the Aligarh Movement. That is why these books and magazines can cover most of the demands of research on Ahmad Khan and his movement.

Since most of Ahmad Khan’s works were published from Pakistan’s state-financed institution for the promotion of Urdu literature, Majlis Taraqqī Adab, Lahore in 1970s, this annotation tries to introduce some other important books that must be essential for the study of this field and through the study of Ahmad Khan and his period we can recognize the whole perspective of the modernization movement in the Muslim society in South Asia from the late nineteenth to the early twentieth centuries.

19世紀半ば以降の南アジア、特に北インドのムスリム社会における近代化運動を牽引したアリーガル運動は、近現代南アジアのムスリムの政治・社会運動を知る上で重要である。1857年のインド大反乱の翌年、イギリスはインドの直接統治を開始し、インドに親英知識層を形成させるべく、近代化や近代的科学教育、出版技術の導入を図った。こうした近代化の波に対し、これに同調した者もあれば、反発する者もあった。サイイド・アフマド・ハーン (Sar Saiyid Aḥmad Khān, 1817-98) は、19世紀後半に、インド・ムスリムの近代化を牽引した指導者として活躍した。アフマド・ハーンは1864年に英語文献のウルドゥー語への翻訳を行う協会を設置したのち、1875年にはムハマダ

* 本稿は、科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」の研究成果の一部である。

** バハーウッディーン・ザカリヤー大学 (パキスタン・ムルターン)

*** 大阪大学大学院言語文化研究科教授

ン・アングロ・オリエンタル・カレッジをアリーガルのちに設置、近代的な科学教育を推進させた。このカレッジには宗教を問わず学生が入学した。大学名が通称「アリーガル大学」と呼ばれたことから、アフマド・ハーンの一連の近代化運動も「アリーガル運動 Aligarh Movement, 'Alīgarh Tahrīk」と呼ばれている。

アキール文庫には、同運動を牽引したサイイド・アフマド・ハーンおよびアリーガル運動関連の文献が200点以上所蔵されている。コレクションには書籍のみならず、関連雑誌も含まれているが、アリーガル運動にかかわった人物による重要な著作やその人物自身に関する伝記等、またアリーガル運動の近代化思想や同運動に感化された文学活動における文体等の特徴に関する研究書、アリーガル運動そのものの政治的、社会的、文学的側面からの研究、最新の文学理論に基づいた研究など、アリーガル運動に関するあらゆる文献が網羅されている。これらコレクションには単一著者による研究書のほか、単一著者の論集、複数の著者による論集など様々で、主にインド、パキスタンから刊行されたものである。

アフマド・ハーンの著作に関しては、1960年代にパキスタン・ラーホールにある国立の「文学振興協会 (Majlis Taraqqī Adab)」から著作集『サル・サイイド・論文集 *Maqālāt-e Sar Saiyid*』が全16巻で刊行された。現在では入手不能な巻もあるが、アキール文庫にはこれが全て揃っている (AQEEL||C||1201||29-45) ので、まずはアフマド・ハーンの著作の多くをこれで目にすることができる。ここでは、これ以外の重要な文献を紹介する。

なお、(AQEEL||C||1201||79-88) および (AQEEL||C||1202||30-38) は、前者がアフマド・ハーンやアリーガル運動に関する雑誌特集であり、後者はアリーガル大学等での講演集である。前者の場合、特に1998年、アフマド・ハーン没後100年を記念した特集号が組まれたが、本文庫には、インド、パキスタン両方の雑誌が収蔵されている。後者の講演集は1911年の講演集が中心となっており、この時期の雑誌をまとめて入手できたのであらうと思われる。(AQEEL||C||1201||92-99) は、アリーガル大学 (後のアリーガル・ムスリム大学) に関する研究書であり、大学そのものの研究のほか、アリーガル大学がウルドゥー文学にいかに関与したかを論じた図書 (AQEEL||C||1201||99) など含まれている。(AQEEL||C||1203||9-46) もまた、アリーガル大学卒業者、関係者に関する研究書だが、回顧録等を含んでいる。特に (AQEEL||C||1203||46) は1891年に刊行された、アリーガル運動の代表的な運動家ナワーブ・ムフスィヌル・ムルク (1837-1907) の演説集で、貴重な一次資料である。

書籍は各国の公的な出版機関や一般の出版社からの刊行物の両者が含まれるが、特に公的な出版機関からの刊行物の中には、現在入手不能なものが含まれ、大変価値のあるものもある。紹介する文献はいずれも、アリーガル運動を研究する上で重要な一時文献や、関連する研究書である。サイイド・アフマド・ハーンの著作の中からは、1点のみ紹介する。それは『ロンドンの旅人たち』で、サイイド・アフマド・ハーンの生涯において最大の転換点となった意義を持つイギリス訪問に関する著作である。また、マウラヴィー・サイイド・イクバル・アリーによる『サル・サイイドのパンジャブ旅行記』も紹介したい。同書もまた、サイイド・アフマド・ハーン研究において、ムスリムが多く住んでいたパンジャブ地方でアリーガル運動がいかに受容されたかを知る上で基本文献の一つとなるからである。すなわち、北インド、特にパンジャブにおけるムスリムの政治運動の展開を知る上で重要な示唆を与えてくれるのである。

Khān, Saiyid Aḥmad, (Khalīq Anjum ed.), 1990, *Āthār al-Ṣanādīd*. vol. 1, 2, 3. Delhi: Urdu Akādēmī Dihlī.
(AQEEL||A||301||17)

19 世紀後半、インド・ムスリム (特に北インド) の啓蒙運動の牽引者として、また雑誌編集者、教育者として知られるアフマド・ハーンの代表的著作の一つで、デリーのイスラーム諸王朝期の歴史的建造物の解説書。同書は初版 (1846、47 年) と第 2 版 (1854 年) で大きく異なるが、本書は第 2 版の再版であり、再版に際して冒頭にデリーの歴史が約 150 ページにわたって付記されるとともに、再版時に撮影した建造物の写真を加えている。内容はまずデリーの支配者の名前が紀元前 15 世紀から 202 代目のヴィクトリア女王までがリストで紹介され、その後デリーで建造された 20 の城塞のリスト、さらに歴史的建造物が図版とともに紹介されている。デリーの歴史を研究する上で基本文献の一つである。なお、近年、アフマド・ハーンが設立したアリーガル・ムスリム大学から、初版および第 2 版の復刻版がそれぞれ刊行されており、本書の重要性は失われていない。

‘Abd al-Haq, 1959, *Sar Saiyid Ahmad Khān: Hālāt o Afkār*. Karachi: Anjuman Taraqqī Urdū. (AQEEL||C||1201||4)

「ウルドゥーの父 Bābā-e Urdū」の尊称を得て、20 世紀初めから「ウルドゥー振興協会 Anjuman Taraqqī Urdū」でのウルドゥー文学作品の出版を指導してきた文法学者アブドゥル・ハクは、アフマド・ハーンが設立したアリーガル大学の出身で、19 世紀後半に活性化したヒンディー語とウルドゥー語の対立のなか、ウルドゥー語の発展に尽力した。本書はアリーガル運動の薫陶を得たアブドゥル・ハクによるアフマド・ハーンの伝記である。本書は現在ほとんど入手できないもので、インド・イスラーム文化としてのウルドゥー語の発展に寄与した研究者が、母校を設立したアフマド・ハーンをいかに評価しているかがうかがえる、きわめて貴重な文献である。

Nūr al-Rahmān, 1950, *Zindagī aur Qawmī, Ta’līmī, ‘Ilmī aur Siyāsī Kārnāmaḥ par Tabṣra*. Delhi: Anjuman Taraqqī Urdū Hind. (AQEEL||C||1201||7)

インド独立直後に刊行された、民族や国家、教育と政治に関する考察をまとめたもの。独立運動の結果としてインド・パキスタンの分離独立が達成されたが、それに関しては独立後の混乱が過ぎた 1950 年代後半以降から、特にパキスタンで国家論が論じられるようになったが、ことインドのムスリムに関しては、少数派としていかにすべきかといった議論は文献が多く残されていない。本書はこうした空白部分を埋める貴重な図書で、インドのムスリムが、国家や民族をいかに理解しようとしていたかがわかる。

Altāf Husain Hālī, 1898, *Tartīb-band*. n.d.: Maṭba‘ Muṭṭabā’ī. (AQEEL||C||1201||11)

アフマド・ハーンの側近であった文人アルターフ・フサイン・ハーリーは、近代詩論である『詩序論 *Muqaddima Shi‘r o Shā‘irī*』や、ムスリムの凋落を詠んだ「ハーリーの六行詩 *Musaddas-e Hālī*」などで知られる文人である。本書は、そのハーリーによる詩集で、インド・ムスリムの社会改革等を詠んだものであり、おそらく初版と思われる。現在この版は入手不能である。

Salīm al-Dīn Qureshī (ed.), 1998, *Correspondence of Sir Syed Ahmad Khan and His Contemporaries*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (AQEEL||C||1201||17)

アフマド・ハーンは、自らが刊行していた啓蒙雑誌『倫理の醇化 *Tahdhīb a-Akhlāq*』に膨大な論考や随筆を掲載したばかりでなく、同時代の文人ら宛に多くの書簡を書いた。本書は、こうしたアフマド・ハーンの手紙を集めたもので、編者は長年大英図書館のウルドゥー語文献の整理を担当してきたサリーム・ムッディーン・クレシーである。大英図書館を中心に所蔵されているアフマド・ハー

ンの書簡を集めた本書は、アフマド・ハーン思想を知るうえで貴重な手がかりを与えるものである。類書に、アラーガル大学で編纂されたものに(AQEEL||C||1201||19)がある。

Yūsuf Ḥusain (ed.) 1967, *Selected Documents from the Aligarh Archives*. Aligarh: Asia Publishing House. (AQEEL||C||1201||18)

アフマド・ハーンが設立した、アラーガル大学は、現在、「アラーガル・ムスリム大学」として、インド有数の高等教育機関として機能している。本書は、同大学に保存されているアフマド・ハーン関連文献を集めたもので、アフマド・ハーンの時代の文書を研究する上で基本文献として利用できる。

‘Atīq Aḥmad Ṣiddīqī (ed.), 1990, *Sir Syed’s Correspondence: Selected Documents from the Sir Syed Academy Archives*. Aligarh: Sir Syed Academy, Aligarh Muslim University. (AQEEL||C||1201||19)

(AQEEL||C||1201||18)がアフマド・ハーンの時代の文書を集めたものであり、本書はアフマド・ハーンの手簡集である。(AQEEL||C||1201||17)が大英図書館所蔵の手簡を中心に収集されたものであるのに対し、本書は、アフマド・ハーンが設立したアラーガル大学内に所蔵されているもので、この2つの図書によって、アフマド・ハーンの手簡のほとんどが読めることになる。したがって、この両図書は2冊を以てアフマド・ハーン手簡集として、アフマド・ハーン研究の基本文献となる。

Sar Saiyid Aḥmad, 1904, *Tafsīr al-Qur’ān*. vol. 7. n.d.: Maṭba‘ Muḥid ‘Ām. (AQEEL||C||1201||20)

19世紀後半のインド・ムスリムの啓蒙運動を牽引したアフマド・ハーンは同時に、イスラームを近代科学のなかでいかに解釈するかという問題に直面した。彼の設立したアラーガル大学は、ムスリムの近代化を図るため、近代科学の教育を進めたが、これにより、一部ムスリムからは、西洋への追従であると批判を受けた。代表的なのは、ジャマルッディーン・アフガーニーによる批判である。こうしたなかアフマド・ハーンは、クルアーンの注釈に取り組んだ。本書は20世紀初めに刊行されたシリーズのうちの1冊である。所蔵されているのはこの1冊のみであるが、この書籍があること自体がきわめて貴重である。

Abu al-Khair Kashfī; Muḥammad Salīm ‘Abd Allāh (eds.) 1954, *Intikḥāb Maṣāmiṁ Tahdhīb al-Akhlāq*. Karachi: Kitāb Agency. (AQEEL||C||1201||49)

アフマド・ハーンが発刊した『倫理の醇化 *Tahdhīb al-Akhlāq*』は、19世紀後半以降のインド・ムスリムの近代化運動の中心的役割を果たす機関誌であった。アフマド・ハーン自身も多く論考や随筆をここに掲載させ、自らの思想、見解を発表していった。本書は、『倫理の醇化』における代表的論考を編纂したものである。アフマド・ハーンの著作は選集等で入手できるが、同時代の論考は案外に入手しにくい現状にある中、1954年に刊行された本書が所蔵されているのは貴重である。編者の一人アブル・ハイル・カシュフィーはカラーチャー大学ウルドゥー文学研究科教授を歴任し、1970年代には大阪外国語大学ウルドゥー語学科で教鞭を執った研究者である。

Arshad ‘Alī, 1998, *Āthār al-Ṣanādīd kā Tahqīqī o Tanqīdī Muṭāla’*. n.d.: ‘Ālamgīr Educational Publishers. (AQEEL||C||1201||55)

アフマド・ハーンはインド・ムスリムの啓蒙運動を引導したが、同時にデリーの歴史的建造物に

関する著作『貴人の痕跡 *Āthār al-Ṣanādīd*』を記したことでも知られる。本書は、『貴人の痕跡』に関する研究論文である。『貴人の痕跡』に関する研究書はほとんどなく、貴重な図書である。なお、本書は学位請求論文として提出後、1991年に私家版として刊行されたが、本文庫にはその私家版も収蔵されている (AQEEL||C||1201||54)。

Ifīkhār ‘Ālam Khān, 2006, *Sar Saiyid Darūn-e Khāna*. n.d.: Educational Book House. (AQEEL||C||1201||58)
(AQEEL||C||1202||12)

アフマド・ハーンの伝記はハーリーによるものが (AQEEL||C||1201||9) 基本文献とされ、研究書も数多く刊行されたが、本書は、家庭でのアフマド・ハーンの姿を描いたもので、極めて珍しい文献である。こうした伝記は、インド・ムスリムの上流層の生活を描いたものではあるが、アフマド・ハーンの実像のみならず、19世紀半ばのインド・ムスリムの生活の様子的一端が明らかになる点で貴重である。

Saiyid Aḥmad Khān, Shaikh Muḥammad Ismā‘īl Pānīpattī, 1961, *Musāfirān-e London*. Lahore: Majlis Taraqqī Adab. (AQEEL||C||1201||28)

1869年のロンドン訪問はサル・サイイド・アフマド・ハーンにとって最大の転換点であった。アリーガル運動の開始はアリーガル科学協会 (Aligarh Scientific Society) 設立の1864年であったが、アフマド・ハーンのロンドン訪問は、彼の思想を完全に変貌させたものであった。すなわち、こんにち我々が知るアフマド・ハーン像は、このロンドン訪問で築かれたと言っても過言ではないのである。本書は、アリーガル運動やアフマド・ハーンを研究する上でもっとも重要な文献である。本旅行記はアフマド・ハーン自身が書いたもので、エッセイの体裁で自身が発刊していた雑誌『倫理の醇化 *Tahdhīb al-Akhlāq*』に連載されていたものを集めたものである。原稿はロンドンで書かれ、1870年3月11日に完成し、書名もアフマド・ハーン自身がつけたが、書籍として刊行されることなく、雑誌のエッセイとして連載されただけであった。内容はロンドンでの滞在の模様や、イギリスの文化、文学状況に関する自身の印象を述べたものである。本書はウルドゥー文学史における最初期の旅行記である点でも重要で、その文体、表現によって、近代ウルドゥー文学における旅行記のジャンルが確定されたと言っても過言ではない。編者のシャイフ・イスマール・パーニーパッティーが『倫理の醇化』の中から旅行記の部分を抜き出し、編集・刊行したことによって、アフマド・ハーンのイギリス滞在の意義を理解できるようになったのである。邦文研究には、松村耕光 2015「アフマド・ハーンのイギリス旅行記について」『言語文化研究』第45号, pp. 149–161. がある。

Nūr al-Rahmān, 1950, *Ḥayāt-e Sar Saiyid*. Aligarh: Anjuman Taraqqī Urdū ‘Alīgarh. (AQEEL||C||1201||6)

本書は9章で構成された、サイイド・アフマド・ハーンの生涯に関する著作である。青年期、イギリス政府に就職していた時期、インド大反乱 (1857年) 期、イギリスへの渡航、啓蒙運動開始期、アリーガル・カレッジ期、ムスリム教育会議期、インドへの貢献と死去の他、宗教に対する貢献、政治信条、ウルドゥー語との関係など、アフマド・ハーンの生涯とインド・ムスリムの教育改革、政治運動に関する考察が行われている。著者は1915年にアリーガル大学に学んだ人物で、1925年までアリーガル運動に関与していた。その結果、アフマド・ハーンの率いたアリーガル運動を、全インドの歴史の中で観察したのである。したがって、本書ではアフマド・ハーンのあらゆる側面を、近現代インドの歴史の中で捉えようとする視点が顕著となっている。著者はアフマド・ハーンを革

命家として捉えず、建設的な任務への関心を向けようとした人物であったと評価している。著者はアフマド・ハーンの時代の直後に生き、パキスタン建国を経験したことから、アフマド・ハーンの人物像についても、理想化することなく、冷静に著述している点が重要である。

Iqbāl ‘Alī, Maulavī Saiyid, Shaikh Muḥammad Ismā‘īl Pānīpattī (ed.), 1973, *Sar Saiyid Aḥmad Khān kā Safar Nāma-e Panjāb*. Lahore: Majlis-eTaraqqī Adab. (AQEEL||C||1201||29)

サイイド・アフマド・ハーンのパンジャブ訪問は、単なる旅行ではなく、1857年のインド大反乱後のインド・ムスリムの生き残りをかけた努力の一つといえる。近代教育の重要性に対する認識は、すでにパンジャブでも共有されていたが、アフマド・ハーンのパンジャブ訪問は、こうした認識をパンジャブのムスリム社会全体に広く浸透させる効果をもたらした。アフマド・ハーンは1873年、1884年、1888年、1894年の計4回にわたりパンジャブを訪問した。訪問の旅にパンジャブの人々に歓迎を受け、パンジャブ、特にラーホールは「第2のアリーガル」とでもいえるほど、アリーガル運動の影響を強く受けたムスリム知識層が形成されていた。アフマド・ハーンの最初のパンジャブ訪問後から、パンジャブのムスリムは西洋の近代教育を広く受容するようになったのである。本書は1884年のパンジャブ訪問を中心に描いたものであるが、本書は、単なる旅行記でなく、アリーガルとパンジャブが、インド・ムスリムの啓蒙運動において共鳴していた状況を描出した著作である点で重要なのである。著者はアフマド・ハーンと同行してパンジャブを訪問した、北中インドのアワド藩王国に居住する判事であった。このことは、アフマド・ハーンにとっても、著者マウラヴィー・サイイド・イクバル・アリーのような友人に恵まれたことは幸運であったとも言えよう。著者イクバル・アリーの本書によって、アフマド・ハーンのパンジャブ訪問が記録に残り、後世に伝えられることとなったのである。

著者は本書で、アフマド・ハーンがパンジャブ訪問時に体験した出来事や発言などを事細かに記録している。しかもそれが単なる記録でなく、19世紀末のパンジャブの記録となっている点でも重要である。アリーガル運動の中心は、言うまでもなくアリーガルやアグラ、アワドであったが、その運動を活性化させたのは、ほかでもないパンジャブであった。1873年の最初のパンジャブ訪問で、アフマド・ハーンに対してパンジャブの人士が与えた熱烈な歓迎、歓待は、ほかの地域と比較にならないものであった。アリーガル運動は、パンジャブに影響を及ぼしたことで、新たな展開を持つことになったのである。当時の政治指導者をして、ラーホールを「活き活きた心の持ち主の都」と言わしめたのはその所以である。本書は1884年に Aligarh Institute Press から刊行されて有名になり、後にイスマーイル・パーニーパッティーが編集し、ラーホールの文学振興協会より刊行させたもので、アキール文庫所蔵の本書は、その初版である。

Altāf Ḥusain Ḥālī, 1939, *Hayāt-e Jāved* (2nd ed.). Delhi: Anjuman Taraqqī Urdū. (AQEEL||C||1201||9)

本書はサイイド・アフマド・ハーンの伝記であり、著者はアフマド・ハーンを最も親しい友人であり、ウルドゥー近代詩の代表的詩人であったアルターフ・フサイン・ハーリー (1837-1914) である。本書は2部構成で、第1部では年代を区切り、それぞれの時代区分に基づいてアフマド・ハーンの生涯を記述している。第2部はアフマド・ハーンの公的、すなわちインドやムスリムのための貢献や、宗教的、政治的、文学的な貢献など、アフマド・ハーンのような様々な姿や、その倫理観、習慣、愛情などについて著述している。巻末には付録としてアフマド・ハーンの家系図や著作のリスト、アフマド・ハーンの代表的著作『インド大反乱の諸要因』(1858年)やクルアーンに解釈に関する議

論等が収録されている。

本書はアフマド・ハーンの最初の伝記であり、本書がアフマド・ハーンを理解する上で最初の著作となる。ハーリーはウルドゥー文学における最初の伝記の著者であり、本書はウルドゥー文学における最初の、総括的な伝記と位置付けられる。アフマド・ハーンという、多様な分野で才能を発揮した人物を一人の人物として描き出している。部分的に描こうとしなかったり、不必要に冗漫に描いた部分、あるいは論理的筋道の欠如した部分、事実関係における矛盾、あるいはところどころに見られる無味乾燥な著述など、技法上の未熟な点が見受けられるものの、ウルドゥー文学最初の伝記作品としては、致し方ないものであるといえよう。こうした部分があるにもかかわらず、本書の重要性が失われることはなく、アフマド・ハーンとアリーガル運動の研究においては最初の重要な伝記であることに変わりはない。著者ハーリーは本書を啓蒙の観点から著述した。すなわち、アフマド・ハーンの運動や努力から読者が学ぶことを意図していたのであった。したがって本書の内容には、アフマド・ハーンの人物像よりも、その功績の記述が多くなっている。いずれにせよ、ウルドゥー文学における伝記文学、アリーガル運動の研究書として一級の文献である。本文庫には新版((AQEEL||C||1201||10), Delhi: Taraqqī Urdū Bureau)も収蔵されている。

Amīn Zubairī, 1964, *Tadhkira-e Sar Saiyid*. Lahore: Publishers United Limited. (AQEEL||C||1201||5)

アルターフ・フサイン・ハーリーによるアフマド・ハーンの伝記(AQEEL||C||1201||9)のような文献に触れると、アフマド・ハーンに関する客観的かつ学術的価値の高い文献の必要性を感じることもある。南アジアの著名な歴史学者マウラヴィー・アミーン・ズバイリー(1958年没)は本書によってその必要性を満したたのである。本書は、ハーリーによる伝記に見られた誤謬等を排除した、アフマド・ハーンに関する基本文献である。本書は2部構成で、その中に21の章が組まれている。

イスラーム世界研究 第9巻（2016年3月）165–171頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 9 (March 2016), pp. 165–171

アキール文庫 サイイド・アフマド・ハーンとアリーガル運動関連文献

正誤表

p. 167, l. 20	AQEEL C 1201 7	→	AQEEL C 1201 6
p. 167, l. 32	<i>Correspondene</i>	→	<i>Correspondence</i>